

会場を提供して下さった。この主世話人は勿論大兄である。これらの催しは、和気あいあい有益な集会で、会員の心が結ばれ、致知の向上に役立ったのである。

われわれの関西の医史研究群は、大兄があつて育てられたのであるが、しかし煩雑な付帯事務をなされたのは、貞淑な御奥様の大きい援助であり、会員等しく感謝するところである。

大兄の御他界後（奥様も次いで亡くなられる）は、愛弟子の長門谷兄が委嘱（遺言に等し）に沿ひ諸事万端を引き継がれ、同じ路を踏みつつ前進に努め今に至っている。

大兄の論著は汗牛充棟、御履歴や表彰などは『医譚』誌に収録されている、披見下されば幸い。単行専書も数部あり広く世に知られているが略する。

諸先生のうち御他界なされた方が少なくない。後輩小生も間もなく大兄の後を追う老病人、手元に依拠書物なく、おぼろな記憶を辿りつつ、ただ小言するのみ、大兄と幽界に在っても談笑したい。（八十五才春記す）

（日本医史学会名誉会員）

## 中野操先生をしのぶ

田中助一

日本医史学会関西支部長として永年御在任になって、会の運営はもとより、多くの有益な著作や論文を発表された中野操博士は、昭和六十一年三月二十一日に八十八歳で御永眠になり、今年『日本医史学雑誌』で追悼特集号を出されることになったことは喜ばしいことである。



私が初めて先生のお名前を知ったのは、昭和十三年二月に億川撰三・大矢全節両氏とはかって杏林温故会を結成され、機関誌『医譚』を刊行された時である。

その年四月二日京都市で日本医学会が開催され、第一分科会の日本医学史学会は第三高等学校の教室で開催された。先生も私も演題を出していて、終了後初めて御挨拶をした。先生は大阪赤十字病院の皮膚科医長であり、私は東京の日本赤十字社病院耳鼻咽喉科医員であったので、親近感を持っていたが、先生は毅然たる態度で一寸近寄り難い印象であった。

しかしその後文通したり、原稿を出して貰うようになって親しくしていただいた。雑誌の編集や出版は大変であったが、先生は奥様の非常な御協力を得てよくやられた。

杏林温故会は「医史と趣味の会」と銘打ってあったように、日本医学史学会の機関誌であった『中外医事新報』や『日本医学雑誌』よりも内容編集共に読み易かった。しかし戦争が激しくなったので、『医譚』は十九年六月第十七号を最後として一時休刊し、先生は中国に軍医として従軍された。

日本医学史学会は初代理事長呉秀三博士のあと、入沢達吉・富士川游・藤浪剛一・山崎佐博士がつかれ、山崎博士の時、二十四年一月杏林温故会を日本医学史学会関西支部と改称され、中野先生が会長に推された。一方会も二十五年五月以後熱心に復活され、私も招待を受けて、二十六年十二月八日武田薬品工業株式会社の十三工場の会議室で開催された第三十五回例会において、「京阪方面で活躍した防長の医人について」と題して話した。その夜は阿倍野区晴明通二丁目二十一番地の先生のお宅に泊めていただいた。翌日午前中は先生の診察があったので、私は付近を散歩し、午後先生の御案内で、天

王寺朽繩坂の梅旧院にある斎藤方策の墓や、天満の龍海寺にある緒方洪庵の墓と大村益次郎の足塚や、内北浜三丁目にある緒方洪庵の適塾等を見て廻り、夜汽車で帰宅した。

先生は先きに休刊された『医譚』の復刊に努力され、遂に二十七年十二月一日第十八号（復刊第一号）を刊行され、以後亡くなられるまで続けられた。

三十二年十一月十二日長崎大学医学部構内に蘭医ボムペの記念碑が建立されたので、除幕式に参列した。その時中野先生や石原明氏等も参列され、観光バスで一緒に市内観光をし、中野先生には御来萩方をお願いした。

五十年五月二十三日先生御夫妻は金婚記念の小旅行を試みられ、御来萩になって拙宅にもお寄り下さったので、市内の史跡名所を御案内したが、とくに医学関係の史跡を見ていただき、大変喜んで下さり、その夜は宿所の萩観光ホテルで夕食を共にした。

その後も先生は長寿を保たれ、五十二年には傘寿、六十年には米寿記念の会が催され、誠にお目出たいことであった。謹んで御冥福を祈りペンを擱く。

（付記）写真は萩市呉服町二丁目にある藩医和田昌景旧宅（国指定史跡、木戸孝允生家）玄関前に於ける中野先生御夫妻である。

（山口県萩市）